



Title	日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究
Author(s)	橋本, 礼子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45704
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	橋本 ^{はしもと ふなき れい} 礼子 ^こ
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 19012 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 9 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真田 信治 (副査) 教 授 工藤真由美 助教授 渋谷 勝己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語諸方言の意志・推量表現という部分体系を対象として、(1)言語変化のメカニズムを明らかにすること、(2)変化過程のパターンを抽出することの2点を目標に、言語変化について論じたものである。

本論は2部8章で構成されている。

第1部では、論の中心となる第2部の各章の位置づけを示すために、先行研究のレビューを行ったうえで、分析の枠組みと研究対象の選定理由を示している。まず第1章では本論文の採る理論的立場を明示し、第2章では日本語における意志・推量にかかわる表現の歴史的な変遷を先行研究から確認している。そして第3章では現代の諸方言の分布を概観している。これらの作業を通じて第4章では、(a)中央語での変化として指摘されている透明性・明晰性志向という変化がはたして中央語だけに顕著なものなのか、(b)中央語では古語のム系形式がモダリティ体系のなかで重要な位置を占め、推量専用形式を析出する土台ともなっているが、なぜ古語のラム系形式やウズ系形式は廃れたのか、(c)中央語とは異なる推量専用形式を分出していない方言ではどのような意志・推量表現体系をもっているのか、(d)意志・推量表現を担っていた形式の変化の過程はどのようなものなのか、という4つの課題を提示している。

第2部では、(a)～(d)の課題の解明のために、いくつかの方言を取り上げ通時的考察と共時的考察を行っている。

第5章では(a)に関して、中央語と同様にム系形式から独自の推量専用形式を分出させた山形県鶴岡方言を取り上げ、意志・推量表現形式の変化を通時的に考察して、ム系形式から推量専用形式を分出する過程は中央語も鶴岡方言も同じだが、その変化の早さは鶴岡方言のほうが緩やかであることを明らかにした。

第6章では(b)の問題の解明として、ム系形式以外を推量専用形式として用いている方言として、ラム系形式を有する高知方言とウズ系形式とラム系形式をもっている静岡県榛原郡中川根方言を取り上げ、その意志・推量表現体系を分析した。そして、それぞれの変化の要因、メカニズムを詳細に記述した。

第7章では(c)の推量専用形式を析出していない方言として、ベイ系形式を用いる福島県喜多方方言を取り上げ、ベイの共時的記述を行った。そして、文献に残っていない喜多方方言の共時的記述を補足すべく、ベイの用例が多い近世前期の資料『雑兵物語』も分析対象とした。なお、古語のベシの異音ベイは、ベシの本流から離れ、多義の真正モダリティ形式として主に関東以北の諸方言に用いられているが、これら諸方言のベイはどのような変化を辿って真正モダリティ形式化したのかという問題について考察した。その結果、事態の意味およびこれより派生されると考えられる当為の意味が喜多方方言には見られず、また『雑兵物語』でもかなり非生産的で成句的なものとして用いられて

いたことがわかった。こうした事態の意味のありかたがベイの真正モダリティ形式化にかかわっていると考えられる。さらに喜多方のベイは、確認要求表現からさらに拡張した新たな意味・用法を獲得していることも明らかになった。

最後の第8章では意志・推量表現を担っている形式が、標準語および近隣の優勢変種との接触によってどのような変化を辿りうるかについて考えるため、名古屋市から伊勢市までの伊勢湾沿岸地域を対象にグロットグラム調査を行い、その資料をめぐって、社会的な変数を取り込んだ分析を行った。そこでは、どの地域・世代にどのような形式のせめぎあいがあるかを報告し、とりわけマイ形式が否定疑問形式としての用法に偏っていく傾向について記述した。

論文審査の結果の要旨

本論文で特徴的なのは、日本語の意志・推量表現の変化のメカニズムや変化パターンの追究のためには、中央語だけでなく、各地方言での変化のメカニズムや変化パターンも並行して見ていくことが必要であるとの考えから、主な分析対象を地域的変種としての方言に定めていることであり、また、その方法も、文献に残っている方言については近世以降の用例を渉猟して分析する方法を採り、文献を利用できない方言については共時的な部分体系を詳細に記述し、共時態のなかに変化を見出す方法を採用していることである。

論文の「まとめ」として、日本語諸方言の意志・推量表現に関する変化を分析対象とすることで見えてきたことを、意味の拡張/縮小の視点、言語接触の視点、そして文法化の視点から総括しているが、いずれも重要な指摘がある。まず、意志・推量表現を担う形式であったものがそれ以外の意味・機能を担うようになる事例として、福島県喜多方方言のベイの確認要求からの拡張と、兵庫県加古郡稲美方言の文末のベイの意志表現に限定された終助詞的用法が挙げられる。言語接触による変化としては、高知方言における動詞・形容詞接続のロウとヤロの文体的棲み分け、伊勢湾沿岸地域にみられる勧誘専用形式のイコマイカの成立やマイカの否定疑問形式化傾向が挙げられる。そして、各地方言での様々な変化過程（変化傾向）が文法化研究の視点、すなわち一般/特殊の視点から詳細に整理されている。

本論文での目標である、(1)言語変化のメカニズムを明らかにすること、(2)変化過程のパターンを抽出することの2点は十分に達成されていると評価する。ともかく、近年の文法化研究の理論を、具体的な現地での事例をもって実証した点において、本論文は斯界に貴重な貢献をなすものである。

ただし、本論文にも問題がないわけではない。それは、対象方言、対象フィールドがやや恣意的に選定されているように見える点である。今後の調査によって、本論文で検討され提示された変化パターンとは異なる部分も出現するであろうことが予測される。しかしながら、それは今後の発展的課題として捉えるべき性質のものであり、本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。